

最高の舞台と広大な庭園

川口ひろ子

欧州各地で行われる夏の音楽祭の中で、レベルの高さと前向きな取り組みで高い評価を受けているのがグランドボーン音楽祭だ。イギリスが一番美しいと言われる5月から8月迄、グランドボーンで繰り広げられるオペラの祭典は、1934年、愛好家貴族によって始められた。自国に質の高いオペラを、という彼の願いに賛同する支援者は多く、その活動は劇場上演の他に若手歌手や演奏家の養成、舞台を映像化しての世界各地への販売等多岐に亘り、今日まで安定した運営が行われている。

以前この音楽祭でオペラを鑑賞した。大震災の2か月半後で余震に脅えながらの必死の旅立ちであった。ロンドンから南へ2時間半程走ると緑の美しい牧草地帯が続きその先の丸い屋根がオペラハウスだ。小振りの劇場はモーツァルトなど古いオペラを聴くのに相応しい空間で、そして最大の特徴は広大な庭園だ。日没が9時過ぎというこの時期、聴衆は長い休憩時間を戸外で楽しむ。植込みの傍らにシートを敷き静かに語り合うご夫婦、一族総出で組立てテーブルを囲み会話を弾ませるグループ、まだ階級制度が残っているというこの国で、男性はタキシード、女性はロングドレスという盛装で、老いも若きも気合が入っている。

上演されたのはモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」。放蕩者のドンと、彼に魅せられた人々の複雑な心の内を語るオペラだ。気鋭の指揮者ユロウスキは、早いテンポできびきびと物語を進行させる。生きることに厭きたブルジョワと、彼らに反感を持つ使用人たちの抵抗物語に読み替えられた演出は、解りやすく見事なものであった。しかし強い演出家に振り回されていない若い歌手や古楽オーケストラもそれ以上に素晴らしいと思った。

最高の舞台と広い庭園で今日という日を目一杯楽しむ人々、小説などを読んで若い頃から憧れていた西洋の上流人の優雅な営みの数々がすぐ目の前に出現する。私は出発前の余震の怖さをすっかり忘れて呆然と眺めていた。